パフォーマンス空間の生成
—サン・フェルミン祭を事例として—

水谷由美子

Phenomena of the space of performance
—a case study of San Fermin Festival—

Yumiko MIZUTANI

要旨

パンプローナ市で毎年7月6日から7月14日まで実施されるサン・フェルミン祭は、守護聖人を敬う地域的な祝祭儀礼である。現代では世界的に有名になり、伝統的なものばかりでなく、現代的なプログラムも増えている。こうした中で祭りの本質と言えるものが、エンシエロ（牛追い）、祝日の行列そしてヒガンテスとその仲間のパフォーマンスであり、そこにはこの都市固有の伝統的な文化が表されている。特に、サン・フェルミン祭では老若男女が皆、全身白い服装をして首に赤いスカーフを巻くという戦後から定着してきた仮装に特徴がある。本論は1999年に筆者がフィールドワークした成果を報告する中で、この固有の仮装と伝統的な祝祭儀礼という文化的なパフォーマンスについて記述し、そこで生成されるパフォーマンス空間の意味と機能について検討したもの。

1．はじめに

パフォーマンス研究の２つの系譜（演劇やパフォーマンス・アートの系譜と人類学や社会学の系譜）を体系化し、学問分野として確立した第１人者であるリチャード・シェクナーは『パフォーマンス研究』で以下のように述べている。「『パフォーマンス研究』は、演劇、舞踊、音楽などの『美学的ジャンル』だけでなく、日常生活におけるパフォーマンス、祭祀や公共の儀式などの文化的パフォーマンス、ジェンダーやアイデンティティのパフォーマンス、大衆芸能、さらに動物、特に霊長類に見られるパフォーマンス的な行動なども含む、広義の『遂行的（パフォーマティヴ）行為』を研究対象とする」（注１）と述べいる。

ここで事例として取り上げるパンプローナ市（スペイン・ナヴァラ州）のサン・フェルミン祭のパフォーマンスの中には、演劇、舞踊、音楽などの分野があり、それらは美学的なジャンルとしてとらえられる側面はある。しかし、ここではむしろ劇場や特設舞台などの催しではなく、旧市街の通り、広場、公園などで行われる儀礼、行列その他大衆の活動を対象とし、これらをシェクナーが上で言う祭祀や公共の文化的なパフォーマンスとして位置づけている。

筆者は1999年７月６日から15日にかけてサン・フェルミン祭の開始から終了の儀礼までのフィールド・ワークを実施した。サン・フェルミン祭における伝統的で重要なパフォーマンスは、エンシエロ（牛追い）、闘牛、サン・フェルミンの祝日の行列、ヒガンテス（巨人人形）やカベスードス（巨頭人形）の活動、ペーニャスと呼ばれる仲間集団の活動などであった。本論は、上記の項目に関するフィールド・ワークを報告するために、そこでの体験やインタビューを織り込みながらサン・フェルミン祭におけるパフォーマンスを記述する方法をとる。そのパフォーマンス空間の生成に、一般民衆がパフォーマーとして、またオーディエンスとしてどのように関わり、その意味と機能を発揮するのかを検証する。

具体的には特に服飾文化研究の立場から、サン・フェルミン祭の儀礼における人々の仮装のパフォーマンスに注目する。また、巨人人形の一団の活動が儀礼において重要な役割をしているので、それぞれの人形の仮装やパフォーマンスについて検討を加えることにする。個々のパフォーマンスの現象解釈には歴史的な記述資料を参考にするとともに、他の祝祭との比較の視点を導入して、パフォーマンス空間の生成の意味と機能を明らかにする。

2．サン・フェルミン祭とエンシエロ

まず、ここでサン・フェルミン祭の成り立ちや特徴を理解することにする。サン・フェルミンは、サン・フランシスコ・サビエルがパンプローナ市の守護聖人に選ばれる以前から当市の守護聖人として敬われてきた。スペインではそれぞれの都市の守護聖人の祝日を持っており、同じナヴァラ州でも都市によって祝日が異なっている。つまり、カーニヴァルのように教会暦に従い、カトリック圏で共通の時期に祝日があるのではない。それだけに、守護聖人の祝日の祝祭儀礼には地域性が強く現れる。

現在のサン・フェルミン祭の形式は、1981年頃から始まったもので新しいプログラムである。市長をリーダーにして、市議会議員、巨人の集団、ペニァスの若者集団、市や国の警察や警備など市民を守る集団、赤十字、州商工会議所、企業家団体、慈善事業団体などで組織された委員会によって運営されている。

サン・フェルミン祭は本来、地域に特化された守護聖人の祭りなので、他都市と同じように小規模な祝祭であった。それが現在では世界中から観光客が集まり、非常に有名な祝祭になっている。その原因を作ったのはアーネスト・ヘミングウェイHernest Hemingway(1899-1961)である。ヘミングウェイは1923年に始めてこの祭りに参加して以来、エンシエロに魅了され毎年のように通い、ついにサン・フェルミン祭を主題にした小説『日はまた昇る』（スペインではLa Fiestaと呼ばれている）を1926年に出版した。この小説が欧米で高い評価を得たために、アメリカ人の多くの読者がサン・フェルミン祭にやって来るようになり、この流が世界に広がったのである。1968年にはパンプローナ市がヘミングウェイの石像を闘牛場前広場に設置している。1999年の今年はヘミングウェイ生誕100周年に当たり、記念書物が出版されたり、肖像画を描いた旗が街路にはためくなど市民が彼を大切にしていることがわかる。

さて、サン・フェルミン祭の祝日は、歴史的に遡ると1590年までは10月10日に祝われていた。この時期は雨が多いため気候のよい時期に変更した方がよいという声が強くなり、1591年からこの守護聖人の祝日は家畜の祝日で、フェリアと呼ばれる当局公認の市が立つ７月７日に移動された。その結果、２つの祭りは合体された。闘牛はスペインの他地域でも行われるものだが、エンシエロはパンプローナに特有のもので、サン・フェルミン祭におけるもっとも重要な祝祭儀礼である。毎朝８時から始まるエンシエロは８日間の長い祝祭期間に人々を吸引する魅力と緊張感を与えている。かつてはカスティジョ広場の中で行われていたが、通りを走る形式に変更された。

エンシエロのコースはサント・ドミンゴの牛の囲い場からサント・ドミンゴ通り、市庁舎前を経過し、エスタフェタ通りを経て闘牛場へと向かうものである。現在では牛追いをするこの通りに毎朝木の柵を仮設してパフォーマンス空間を作る。終着点は闘牛場なので、逆に考えると闘牛場の空間が市街にはみ出して来ていると言える。つまり、生活空間を闘牛場のようなパフォーマティヴな空間に変えて、通りの祝祭的なパフォーマンス性を高めているのだ。特に過去に死者が何度か出たことが報道されているので、極めて危険な祝祭儀礼だという認識が広まっている。危ないのは闘牛との格闘のみならず、むしろコーナーや闘牛場の入り口で人だかりができて、人の下敷きになることだそうだ。現在はエンシエロの参加者は登録制で、参加料を保険代の代わりとして支払っている。赤十字の救急車は毎朝エンシエロの各ポイントと闘牛場で控えている。筆者が宿泊していたピオ12世通りの先には大学病院があり、早朝には毎日のように救急車が走っていく音を聞いたし、朝刊を開くと前日のエンシエロでの怪我人の入院姿あるいは治療の様子が記事になっている。毎朝、人々はエンシエロに参加したり、見たりすることでこの儀礼の死に立ち向かう程の緊張感と迫真性を味わうのである。

筆者は７月７日にエンシエロを実見し、翌日の７月８日にはエンシエロの終着点である闘牛場で、参加者役1000人程度の人々と一頭づつ放たれた雌牛との闘牛を見た。観客はすでに朝７時には満席に近い状態で、８時３分頃に到着するエンシエロの牛と人々を待っている。この間にブラスバンドの演奏があり、昨晩から酔いどれている若者たちは早朝とは思えない元気さで自分の席で歌い踊っている。そこで若者の喧嘩が始まり、観客はそれに盛り上がる。大変な賑わいの中で、８時に始まったエンシエロが到着する８時３分頃をじっと待つ。エンシエロの牛は、その日の夜に闘牛で殺される運命にある牛たちで、闘牛場に来るとそこの牛舎に入っていく。改めて牛舎から放たれた雌牛は、あちこちと刺激されてそれに向かっている。牛に挑んで行く勇敢な人たちが、尻を叩いたり角を掴もうとしたりして格闘をする。その反動で牛が走り出すのでぎゅうぎゅう詰めの人が所狭しと逃げまどうのが滑稽で、観衆は歓声を上げて笑い楽しむのである。ここでのパフォーマンスは、危険性のある緊張感と笑いによる弛緩とが繰り返されて、会場は大きな盛り上がりを見せる。しかも、パフォーマーとオーディエンスは、明日は立場が逆転するという関係にある。また皆同じ仮装をしているので一体感があり、見る人と見られる人の間には連続的な関係が生まれる。

カフェ・イルーニャで出会ったカナリア諸島から来た男性グループ（50歳代）の内で１人が明日参加するということで、午後のお茶が盛り上がっていた。

彼らの会話から、エンシエロへの参加は肝試しのような印象を受けた。彼らは無事にやり遂げたら故郷に帰り武勇伝として語り継ぐようだ。平日で1000人規模、祝日、週末は2000人から3000人の市民や観光客がエンシエロに参加する。広場のカフェでは皆、パフォーマーとオーディエンスの両方になることに、ある種の期待感と緊張感をみなぎらせているのだ。

3．サン・フェルミン祭のチュピナソ（開会儀式）と仮装のパフォーマンス

7月6日の12時に始まるチュピナソと呼ばれている開会儀式の模様を記述しよう。なぜなら、チュピナソでは仮装を通じた暴力性と遊戯性に富んだ人々のパフォーマンスを見ることができるからだ。

この日、筆者は案内役をかって下さった村松文子（注2）さんと大学院生の羽野優子さんと一緒に宿泊場所であるマリアさんのアパートを午前10時頃に出てバス停に行くと、周囲の建物から全身白づくめの装いで赤いスカーフと赤いサッシュベルトをしている人々が、ネズミが穴から出てくるようにあちらこちらからやって来る情景に出くわす。この服装がサン・フェルミン祭特有の仮装である。サン・フェルミン祭での仮装は、すべての人が同じ姿になるという特徴がある。

バスで5分ほど行き、街中を10分ほど歩いて午前10時30分頃にパンプローナ市庁舎前広場のコンシストリアル広場に着く。人々が開始儀式に参加しようと少しずつ集まって来ている。村松夫人が、「ここは人で一杯になり危険だから最近は近所のカスティジョ広場でもチュピナソがあるのでそちらへ行きましょう。自分が家族で参加しているカシノ・プリンシパルという集団のホーム・グランドがその広場に面していて、そこのバルコニーから見れば様子がよくわかる。」とおっしゃったので、そこへ行くことにした。12時までは1時間以上あり続々とパンプローナの市民が広場や広場に面したバルコニーがあるサロンに集まってくる。

地元の人に話しかけられおしゃべりをしている内に、階下の広場にはカヴァと呼ばれるシャンパンを2本も3本も持った10代の若者が、続々と集まってくる。まだ11時30分を過ぎた頃にも関わらず、若者はカヴァをお互いに掛け合い、持ってきていた小麦粉をその上に掛け、さらに生卵を投げ合っている。真っ白な服装が、どろどろになり髪も白と黄色で金髪のように変色している。

こうした騒ぎをしている内に12時になり、チュピナソが始まる。バルコニーの反対側に大きなスクリーンが掲げてあり、それを見ながらカシノ・プリンシプルの会長が、市庁舎で市長がチュピナソに点火するのに合わせて点火する。このロケットは空高く昇り爆裂する。それを何度も繰り返している内に、スクリーンの中で初代女性市長が開始の宣言をしている。それに向かって広場の人々は赤いスカーフを首からほどき、両手で三角の2辺を持って頭の上に掲げ、「パンプローナの人」「ヴィヴァ・サン・フェルミン」などを合唱する。その間もチュピナソが打ち上げられ続けている。

しばらくするとぎゅうぎゅう詰めになったコンシストリアル広場からカスティジョ広場へと人の波が押し寄せてきて、今度は年齢を問わずシャンパンの掛け合いが始まる。その様子を高見の見物のように眺めていた我々のバルコニーまで生卵が飛んできた。人々はだれかれかまわず攻撃するのだ。

カヴァやワインの瓶は地面に投げられ、割れて瓶の破片で道路や広場は危険な状態になっている。しばらくして広場の隅に待機していた救急車が遠ざかり、その後に同じく待機していた巨大な清掃車が掃除を始めた。サン・フェルミン祭の期間、一日に何度となく清掃車が同じように街のあちこちを掃除して回っている。それは、清潔を保つだけでなく、危険なものを取り除く目的であることがこの状況から推測できる。

ほんの10数分の間に、人々の白い清潔な服装が暴力的な遊びによって、シミが付き紫色や黄色に変色する。これは市民同士の間で習慣的に了解された遊びの世界なので、誰も汚されても怒らない。むしろ子供に帰り、お互いにどろんこ遊びをしているように楽しんでいるのである。このパフォーマンスを通じて人々は自由や放埒そして狂乱と酩酊が許された世界に入ったことを自覚できる、つまりこの行為はサン・フェルミン祭の世界への通過儀礼なのだ。広場の中央スタンドでは、トゥキストゥラリスやガヤテロスの伝統的な民俗音楽の演奏に合わせて、パンプローナ人が民俗舞踊をとりつかれたように陽気に踊っている。

こうした狂乱とも言えるパフォーマンスは7月14日の祭りの最終日に闘牛場でさらに過激に展開された。筆者が席に着いた午後6時過ぎには真反対に席を占めたペニャスの団体はチュピナソの時と同様に、互いに激しくカヴァ、小麦粉、そして生卵を掛け合う。午後6時30分に闘牛が始まってもそれをよそ目にしながら、激しくそれを続けている。その中の何人かが透明なビニールの合羽を着ていて、この日のパフォーマンスを覚悟して自己防衛をしているのがわかる。そして見る見る内に白い人の群は、黄色の群に変わってしまった。闘牛が終わった後、闘牛場の外で午後10時頃にもペニャスが同様の大騒ぎをしていた。サン・フェルミン祭の初めと終わりにこうしたクライマックスがあり、人々は純粋な白を汚すことによって、祝祭のパフォーマンスに入り、また日常に戻るという過激な通過儀礼をすることを

好んでやっている。

パンプローナ史やサン・フェルミン祭について研究をしているフェルナンド・ウアルデ氏（注３）にインタビューしたところ、「白に赤のスカーフという仮装の習慣が始まったのは1940年代頃からで、それまでは普段着用している服装を着ていた。ただし、若者のペニャスという仲間集団は、それぞれの集団ごとに独自な服装を揃えていて、黒や青の共通のシャツなどを身に付けていた。現在でも、ほとんどの人々が上下白の装いだが、ペーニャスの集団によって、青のスカーフで青と白のチェック柄の上着を白い服の上に重ねたり、黒の上着を同様に着用するなど、かつての面影を示している。」ということだ。

このように統一した仮装は戦後定着して来たものだが、赤いスカーフはフェルミンが殉教で流した首の血を表しているとパンプローナの人々に信じられている。このスカーフの着用は信仰の気持ちを表す新しい伝統の形である。スカーフの三角に垂れ下がる部分には集団毎に工夫した伝統的な紋章やマークを刺繍していて、自分が属する集団のアイデンティティを表す。一般に売られているものには、ナヴァラ州かパンプローナ市の紋章が刺繍されている。筆者は前者のものを選び、この期間中毎日身に付けていた。祭りの期間に旧市街に出かけるときは、なるべくこのような仮装をして出かけるように心がけた。白の靴を持って行っていなかったので、手に入れるまで緑色の靴を履いていたら、大きな違和感があり落ち着かない。この時期はパンプローナ市外あるいは国外から来た人も、マナーかあるいは楽しみか、いずれの理由にしろサン・フェルミン祭の習慣に従っているのである。

その結果、市街のいたるところがサン・フェルミン祭のパフォーマンス空間としての色彩を帯びる。そこかしこに生成された仮装の空間の力が、人々に共通の仮装へとさらにし向けるのだろう。祝日の服装はより完璧に近く、清潔に全身白で装う姿がまぶしく感じられるのだ。それ以外の日にはパンプローナに着いたばかりの観光客や体温調節のために赤以外の色物のカーディガンを重ねたりという服装を見かけることがあり、７日の祝日とそれ以外の日との違いを知る体験をした。また、地元のメイカーが作っているサン・フェルミン祭用でエンシエロをモチーフにしたＴシャツが人気で、多くの人が身に付けている。白地のＴシャツだが模様は奇抜な色も使われているが、それは鷹揚に受け入れられているようだ。

パンプローナの旧市街ばかりでなく筆者が宿泊していた山口公園近くの近郊住宅街でも、誰もがサン・フェルミン祭の間中、前述したような仮装を毎日している。また、当市ではサン・フェルミン祭期間の平日は午前中だけ働き、午後は自由という会社が多い。この期間に働く人はオフィス・ワークであろうが、バールや売店であろうが、皆がこ仮装姿で出かけている。つまり、この仮装は儀礼服のみならず仕事着でもある。会社やお店は全面的に開店休業というところも多く、街中が長い祝祭期間を楽しむのである。７月15日の朝にはまるで何もなかったように、普段の服装を着て仕事に出かける市民の姿を見て、どちらの世界が本当なのかと錯覚を覚えた。９日間も同じ服装の世界に浸っていると、それは仮装ではなく本来の服装のように思えてくる。

４．サン・フェルミンの祝日の行列

サン・フェルミン祭での最大のパフォーマンスは、７月７日のサン・フェルミンの行列である。ここでは参加者のパフォーマンスとして筆者の行動と行列におけるパフォーマンスを関わらせながら朝から行列終了までの状況を記述する。この日は朝５時30分に起きて、エンシエロに行く準備をした。８時のエンシエロを見るためには１時間前には沿道に到着していなければならない。パンプローナ人と同様に白の上下を着て、６日に公園の露天で買った赤いスカーフ（Panuelico rojo）と街のコンヴィニエンスストアで買った赤いサッシュベルトを腰に結び、サン・フェルミン祭の世界の住人となって出かける。

エンシエロの沿道に到着したのは午前７時頃であった。しかし、すでにエンシエロの通りを仕切る柵の前には何重にも人垣が出来ていて、とても見られそうにない。そこで少し場所を変えてスタート地点に近い小さな広場から見ることにした。１時間近く待って人々のざわめきと共に一瞬で牛追いの人と牛の走行が終わってしまう。人垣の間からわずかにしか見えない。カメラにはおよそそのタイミングをつかむことは出来なかった。この日、プログラムによると午前６時45分に起床ラッパのためのブラウスバンドが旧市街の中心部を演奏して練り歩いている。我々がエンシエロを見終えて通りを歩いていた午前８時過ぎには、まだ延々と幾組かのブラスバンドが、通りのあちこちで元気に演奏して練り歩いていた。通りでは宿がない若者が公園で眠っていてそのまま起き出して来たような姿やまだ酔いが醒めず昨晩から酩酊が続いている人々を多く見かける。サン・フェルミン祭はこうして朝が早く、また夜が長い。今日と明日の境目がないとさえ言える。石畳の上には、昨日の前夜祭から朝まで人々が飲み明かしたと思える瓶類があちこちに散乱し、瓶から漏れ流れたアルコールの匂いが通りを充満させている。嗅覚からも、サン・フェルミン祭独特の空間が生まれる。

その後毎日のように昼、夜を問わず石畳の通りやアスファルトの道の中央分離帯の芝生の上などに、人が行き倒れているかのように眠っている光景を見た。タクシーの運転手が「飲み過ぎて家にたどり着

く前に倒れてしまう。自分もそういうことがあるが、人の姿を見ていると戦争でのたれ死にしているようで怖い。」と言っていた台詞は印象的であった。それほど徹底して人々は楽しむのだ。

行列が始まる11時までは時間がある。昨日行ったカシノ・プリンシパルでチュロスとチョコラーテの朝食を取り、生バンドの演奏に踊る人々と少し会話を交わした後、10時過ぎにカシノを後にして、人混みの中をくぐり抜け市庁舎前広場に行く。時間になると行列はまず巨人人形の集団から始まり、定められた順番通りに市庁舎から出てくる。その具体的な様子はあまりの人垣で少し先回りした場所からしか見られなかった。この日は最高の人出であり、行列の全容を取材しようと思った筆者たちを悩ませる。裏通りを走り回りながら先回り先回りをして、ようやくサン・フェルミンが安置されているサン・ロレンソ教会の入り口付近に辿り着いた。ミサを終えた教会からサン・フェルミンの像が現れ、何千人と取り巻いている観衆がざわめく。

サン・フェルミンの像と廷臣が加わり、行列は以下のような定められた順番（注４）で行進する。

①巨人（ヒガンテスとカベスードス）の行列
②サン・ロレンソの十字架、大司教職の十字架
③大工と農民の職業組合（ギルド）
④キリストの受難の信徒団体かつマリアの信徒団
⑤ラッパ吹き、ケトルドラム（ティンパニー）、市旗そして伝統的なフルート奏者であるトゥキストゥラリスTxistularisやガイテロスGaiterosの演奏
⑥サン・フェルミンの廷臣
⑦サン・フェルミンの像
⑧大聖堂の管区代表団、パンプローナの大司教
⑨職杖奉持者
⑩市議会議員、市長、お仕着せを着た案内役
⑪市の警察、正装した護衛
⑫パンプローナの楽団

通過ルートは、市庁舎から大聖堂に市長や市議会議員が聖職者を迎えに行き、市庁舎にいったん戻ってから、行列を開始する。市庁舎から市長通りを通過し、サン・ロレンソ教会で黒い顔をして錦糸織りの見事な宗教服をまとったサン・フェルミンの像と御輿の団体を合流させて左折し、サン・アントーン通りを通る。サパテリーア通りでは子供がサン・フェルミンに花を捧げる儀礼をして、サン・フェルミンの歌の歌唱をして市庁舎に戻る。行列は約２時間ほどで終わり、行列の沿道に集まった多くのパンプローナ市民や観光客は街中のあちこちへと散って行った。

今年の行列の特徴は、初代女性市長（６月の選挙で当選したばかり）が参加したことである。まだ３７歳の美しい市長である。彼女は手に金色の錫杖を持っているので、すぐに市長とわかる。実際に、市議会からの参列者は制服のように同じ服の礼装をしている。それは今世紀初め頃から、モーニング・コートにシルクハットという現代ヨーロッパの昼間の礼装を取り入れたものである。ヴェストの上には鎖を付け、上着の上には市章を象ったメダルを付けている。

前述のウアルデに聞いたところ、「女性の場合には1979年になって市議会議員が誕生したために、市庁舎のバルビナ・ルサルトゥが中心にプロジェクトチームを作り礼装を考案した。パンプローナには16世紀から17世紀にかけて修道女のような民俗衣装はあったが、あまり魅力的ではないということで、ピレネー山脈にある渓谷の村ロンカルとサラサールの民俗衣裳を参考にして、女性の正装をデザインした。」これを制作したのは、ウアルデ氏の妻のセリア・ナヴァッロである。実際の衣装を説明すると、黒い踝丈のプリーツがある絹のスカート、バター色のタートルネックでプリーツがあるシャツ、長袖でヴィネガー色の花刺繍と銀の波形の装飾が施された黒の上着、そして黒絹のショールである。

ナヴァラ州はバスク地方の一部を成している。フランコの独裁政権は彼の死と共に1975年に終わりを告げた。王国が復興した後、バスク地方は１州としてまとまろうという気運が高まった。しかし、ナヴァラだけがかつてのナヴァラ王国の伝統を守り、一県一州を形成し他県とは１線を画すことになった（注５）。しかし、バスク民族文化の復権という点では、他県と同じようにフランコ時代に禁止されていたバスク語での教育が復活され、バスクの伝統的な歴史や文化を継承するための積極的な活動が行われている。こうした中で、女性の礼装にバスクの伝統を織り込もうという発想は自然の成り行きに違いない。

５．ヒガンテスとカベスードスのパフォーマンス

以上の行列でパフォーマティヴな行為をするのは、巨人人形の一団である。沿道の人混みの中で、その大きさで人目を引くばかりではない。ヒガンテス８体にはそれぞれ伝統的なバスクの楽器奏者が団体を組み伴奏して歩く。その音楽に合わせて巨体であるヒガンテスが踊り、狭い旧市街の通りは大変な盛り上がりを見せる。

現在のヒガンテスは1860年にパンプローナ近郊出身の画家タデオ・アモレナTadeo Amorenaが、世界平和を表現するように４大大陸の王と王妃を制作するように考案した。実際にはヨーロッパ大陸、アフリカ大陸、アジア大陸、アメリカ大陸そしてオセアニア大陸の５大陸あるが、アモレナにその知識がなかったのかどうかわからないが、前４者のみを計画した。市庁舎はこの提案を受理したために、アモレナが創作したヒガンテスが現在まで用いられてい

る。全体には中世時代を思わせるような豪華な王室の正装がデザインされているが、彼らは空想的な存在なので、服装も自由に時代性と民族性が混合していて、考証を差し挟んで解釈することは無意味である。ここではアメリカ大陸の王と王妃の肌が黒い点を指摘するに留める。

ヒガンテスの８体はディスプレイされているときは、地面から高さ3.85～3.90mあり、人形の中に人が入り、肩に革ベルトを当てて持ち上げると約4.20mになる。普通の人の約2.5倍にはなり、子供からはまさに巨人に見えるだろう。重さはヨーロッパの王Josemiguelericoは63Kg、王妃Josephamundaは59Kg、アジアの王Sidi abd El Mohameは63.5Kg、王妃Esther Arataは64Kg、アフリカの王Selim-pia Elcalzaoと王妃Larancha-laは59～64Kgの間で、おおよそ全体が60Kg前後あることになる。

ヒガンテスの団体のメンバーは、このように自分と同じくらいの体重がある人形を、肩に背負って随伴する音楽隊の演奏に合わせて民俗舞踊のステップをする。いとも軽々と踊り、回転して衣装を大きく揺らせて空間を動かす担い手のパフォーマンスは観衆を圧倒し、ヒガンテスが張りぼての王と王妃であることを一瞬忘れさせるのである。

ヒガンテスは廷臣とも言える巨頭人形のカベスードスやキリキスあるいは半馬半人のサルディコスの一団を従えているので、観衆はサン・フェルミン祭におとぎの国の宮廷が出現したようなイメージを持つことができる。ヒガンテスは威厳があり勇壮な姿を示しているが、他の巨人は滑稽な役を担っている。

カベスードスの一団には、市長、唯一目が動く市議会議員Mariquita Perez、祖母、そして日本人の男女の５体がある。これらは、1875年にフェリックス・フローレスFelix Floresによって制作され、ヒガンテスの王室の仲間入りをした。それぞれ１４Kgあり、巨頭のサイズは、H.90ｃｍ、W.70ｃｍ、外周200ｃｍである。体は等身大で頭だけが巨大に誇張されているので、そのアンバランスと顔の造形が滑稽さを誘う。祖母と呼ばれているカベスードスは髪が額で巻き毛になっていて、青の上着と赤のスカートを着ている姿はとても若く見えて、人物の性格とのギャップがおかしい。さらに、日本人が造形されているのは19世紀後半にサビエルの存在を介して、パンプローナと日本との関係がすでに意識されていたことを示している。ただし、筆者が日本人のカベスードスを見ると２体とも額が高く、女性の髷のつもりの髪型も男性のやや低くした丁髷のように見える。また、細長い切れ目や眉毛はまるで中国人を表す時に用いる誇張表現のように感じられる。衣装は袖口が大きく開いていて着物とのかすかな関連性を感じさせるが、全体は中国風シルエットのコートのようなデザインである。そのために、服飾文化の正しい情報が欠落していたか、中国と日本とが文化的に区別されておらず大まかに把握されていたと推測できる。彼らは巨人人形の王国のある種の権威の役割で、厳かに歩くだけである。子供たちに話かけたり、幼児を抱きかかえたり、写真撮影をするなどたびたび子供とコミュニケーションをする姿を見ると、彼らが子供に祝福を与えることが期待されていることがわかる。

キリキスKilikisは地域の滑稽な議員を表していて、「バルバス」、髭がある「パタータ」、「ヴェッルゴーン」、揖保のある「コレタ」、「カラヴィナグレ」そして「ナポレオーン」と名付けられている。パタータとナポレオーンは1912年にバルセロナのエスカレルによって、ヴェッルゴーンとカラヴィナグレは1914年にヴァレンシアのポルタコエリによって制作されたもので、カタルーニャやアンダルシアの影響を受けて制作された新しい人物と考えられる。この６体の廷臣たちは、三角帽トリコルヌを被り、２人づつお揃いの上着アビとベストを着用し、白いクラバットを付けているので、ロココ時代を想起させる。ただし、全員お揃いの白い長ズボンは、民衆を象徴するものなので、上半身の貴族的な装いと下半身の民衆的な装いという対象が、彼らの存在が道化的な存在であることを示唆している。

巨頭のサイズはH.65ｃｍ、外周1.40mなので、カベスードスよりもやや小さい。彼らは行列の時にはヒガンテスが通りを進む前にいて、先駆けのように通りを空けるように取り計らったり、手に持つ泡のボールが付いた打ち棒で観衆を叩いたり、からかったりして歩く。彼らの顔は揖保があったり各部が誇張されていて醜く、それぞれの顔の表情が、愚かで馬鹿なあるいはすっとんきょな顔をしているために、そのままでも滑稽な存在だが、子供たちを威嚇したと思うと、すぐ先には喜ばせたりして、執拗に子供たちに迫るものである。

サルディコスZaldikosは、現在使用されている６体の名前は知られていない。制作年代は２体が1912年に、残りの４体が1914年頃と推定されていて、制作者は４体のポルタコエリだけが知られているのみである。重量は25～30Kgあり、精巧に作られた馬は肩と腰で支えられる。キリキスと同様に子供を追っかけたり、泡のボール付きの打ち棒で叩いたりと、かなり激しく動き回る。担ぎ手はまじめな顔をして、突如、不意打ちを掛けるように沿道の子供や大人を叩き始めるので、皆が驚き騒ぐ。子供は楽しむばかりか、泣き出すこともある。それを廻りが見て楽しむという具合いである。

彼らは皆同じ衣装を着ている。衣装の色は、基調の赤と縁取りやアクセントに入れた模様の黄色が対象的で、道化師の衣装に見られる誇張表現が印象的である。サルディコスは皆同様に臀部に大きくパン

プローナ市の紋章が付けられているので、ヴァレンティン・レディンが「サルディコスつまり小さな馬は、半分道化師で半分従者である（注６）」と言うように、こうした服装は彼らがサン・フェルミン祭の間に出現した王国のお仕着せを着た従者であり、同時に滑稽な道化師だと考えることが出来る。サルディコスの仲間はキリキスと同様に沿道の子供から大人までに攻撃的な態度を示す反面、自らの滑稽さによって子供たちにもからかわれるという道化師の両義的性格を持った存在である。

サルディコスは、フリオ・カロ・バロッハが『カーニバル』で、パンプローナ市文書保管室に残された15世紀の日付の『同盟の特権』の写本の欄外に描かれた笛を吹くサルディコを紹介していて、「その後巨人やカベスードスとともにサルディコスが1598年と1648年に祭りに登場した（注７）」と記している。さらにバロッハはこれらの巨人あるいは巨頭人形は、バスク地方の多くの場所でカーニヴァルの仮装であることを指摘している（注８）。

紙面の関係上、詳しく述べられないが、ヒガンテスの歴史を簡単に遡ると、13世紀以来、パンプローナは３体の巨人人形（木製で粗く掘られたもので石炭採掘者のペロ・スシアレスときこりのマリ・スシアレスそしてフセフ・ルクラリ）を持っていたことが知られている。また、17世紀になるまでに６体の巨人人形が大聖堂に属し、パンプローナの祝賀の間に踊った。一方でパンプローナの市庁舎は他の４体の巨人人形を持っていたことが知られている。それは、ヒガンテスが教会と世俗の支配者の両方で持たれていたことを示している。

I. バレステナの『ヒガンテスとカベスードス』によると、「17世紀の初め頃農民のホアネス・デ・アスコナが巨人人形の仮装行列の責任者で音楽係りとして１人の吟遊詩人を連れていた。暗くなって闘牛が終わることには、打ち上げ花火やネズミ花火があり、さまざまな種類の花火を持った巨人が集まって来て、広場を踊りながら一回りした後、火が付けられる習慣があった（注９）」。サン・フェルミン祭の終わりに巨人人形が燃やされるのは、カーニヴァルの人形がそうされるのと同様の習慣である。

以上に述べたことから、ヒガンテスやカベスードスそしてサルディコスは、人物や形は変わってきているが、非常に長い伝統があり地域の民俗文化を代表するもだと理解できる。さらに、彼らはカーニヴァルの仮装に共通した人物なので、道化的な性格が付加され、滑稽なパフォーマンスをする原因が納得される。彼らの一団はパンプローナ市のあちこちで、一日のかなりの時間、場所を変えて練り歩くが、彼らのパフォーマンスによってそれぞれの空間は物語的な密度が高められ、喜劇性を帯びた民俗の伝統空間へとパフォーマティヴに変容して行くのだ。

６．まとめ

以上では、1999年７月６日の正午に始まり、７月14日零時まで続くサン・フェルミン祭のフィールドワークを通じて、祝祭日における行列や巨人の一団のパフォーマンスの意味や機能を検討してきた。サン・フェルミン祭の仮装は、巨人人形の一団の仮装を通じてカーニヴァルと共通した性格のパフォーマンス空間を生成している。しかし、一般大衆の仮装は大きく異なっていることがわかる。つまり、サン・フェルミン祭の仮装はすべての人に共通していることである。筆者はこれまでにカーニヴァルにおける仮装の研究をしてきたが、そこでは仮装を通じて人々は日常の自分とは異なる身分や職業の仮装、性的異装、あるいは動物の仮装などに変身し、自己を開放して無礼講を楽しんでいた。

サン・フェルミン祭においては、カーニヴァルに見られる２律背反性や価値観の転倒（注１０）ということは構造的に存在していない。それはこの期間が守護聖人の祝日であり、宗教儀礼から発しているという性格と関係がありそうだ。なぜなら、カーニヴァルは起源から発展過程を含めて完全に世俗的な祝祭だからだ。

本論で記述したエンシエロとサン・フェルミンの祝日の行列そして巨人人形の仲間たちのパフォーマンスはサン・フェルミン祭の本質であるが、現代化したサン・フェルミン祭のプログラムは同時代性を取り込みかなり幅広い内容になっている。こうした現代的に発展した祝祭において、パンプローナやバスクの伝統を象徴的に示す民族性が現れたパフォーマンスは、この祭にやってくる人々の意識を伝説的世界という夢の世界へと導く機能がある。そこでは、祭りの参加者は自分が実在する場所とイメージの世界の両方で、パフォーマーになったり、オーディエンスになったりしながら、固有のサン・フェルミン祭体験を紡ぎ、歴史と現代が交錯するパフォーマンス空間を生成することができる。

注釈：

（注１）リチャード・シェクナー、高橋雄一郎訳、『パフォーマンス研究』、人文書院、1998年、１頁。

（注２）パンプローナの男性と結婚し20年以上、当地に在住している。サン・フェルミン祭に関する多くの情報の提供を受けるとともに、重要なインタビューにおいて通訳をして頂いた。

（注３）ホテル・ラ・ペルラ勤務。Fernando Hualde, trans.byLarryBelcherl,Hemingway:Centennial Footprint, Hotel Maisonnave,1999の筆者。サン・フェルミン祭に関する長時間のインタビューを２度に渡って受けて下さった。資

料等の提供も受ける。

（注４）Sanfermines. 204 Hours of Fiesta, Larrion & Pimoulier, 1999.を参考資料として、それぞれの役柄の名称を記す。

（注５）レイチェル・バード、狩野美智子訳、『ナバラ王国の歴史』、彩流社、1995年を参考にする。これはナヴァラが他のバスク地方と異なり、ナヴァラ王国以来の自治の伝統を現代まで尊守することができたフエロスと呼ばれる法について研究されたものである。

（注６）Sanfermines. 204 Hours of Fiesta,op.cit.,pp.170-171.

（注７）フリオ・カロ・バロッハ、佐々木孝訳、『カーニバル』、法政大学出版局、1987年、250頁。252～253頁にパンプローナにおける中世のサルディコスの図像が紹介されている。

（注８）バロッハ、先掲書、249～251頁。

（注９）Ignacio Baleztena, Navarra Temas de Cultura Popular:Comparsas de Gigantes Y Cabezudos, Gobierno de Navarra,1987.pp11-20.「パンプローナの巨人たち」の項を参考にする。スペイン語の翻訳においては、山口県立大学猪又徹教授にご尽力を頂いた。

（注10）黒田悦子、『スペインの民俗文化』、平凡社、1991年、203～206頁。

ここにカーニヴァルにおける価値観の転倒や２律背反性などに関するカーニヴァル論が紹介されているので参考にされたい。

著者のカーニヴァルに関する論考を以下に示す。

拙稿、「道化服飾の性格的なるもの ー ニュルンベルクのシェンバルトラウフを事例として」、『成安女子短期大学紀要第28号』、1990年、69～76頁。

拙稿、「謝肉祭における仮装の意味と機能－19世紀ケルンの『愚者の王』」、服飾美学会誌第26号、服飾美学会、1997年、113～135頁。

拙稿、「18世紀ヴェネツィアにおけるバウタの仮装 ーピエトロ・ロンギの作品を中心にー」、服飾美学会誌第28号、 服飾美学会、1999年。

資料編：

１　サン・フェルミン祭のプログラムを知るための資料

パンプローナ市提供のインターネット情報 サン・フェルミン祭1998年～1999年

Programa de Fiestas de San Fermin 99 Pamplona, 1999.

Pamplona Iruna, Ayuntamiento de Pamplona, 1998.

Ignacio Baleztena, Navarra Temas de Cultura Popular:Comparsas de Gigantes Y Cabezudos, Gobierno de Navarra,1987.

Valeriano Ordonez,Navarra Temas de Cultura Popular: San Fermin Y Sus Fiestas, Diputacion Foral de Navarra.

Luis del Campo Jesus, Navarra Temas de Cultura Popular: El Encierro de los Toros, Diputacion Foral de Navarra.

２「サン・フェルミン祭におけるイヴェント・プログラム」の紹介

①サン・ロレンソ教会サン・フェルミン礼拝堂で実施される宗教的行事

７／６　20：00～サン・フェルミンの荘厳な　晩禱 Visperas

７／７　10：00～サン・フェルミンの祝日における荘厳なミサ
サン・フェルミンの行列

７／９　11：00～子供の日におけるミサと子供によるサン・フェルミンへの献花
ヒガンテスとカベスードスの一段とともに子供の行列

７／11　12：00～祖父母の日における年輩者のためのミサ

７／14　10：45～市議会の代表による行列（市庁舎からサン・ロレンソ教会）
11：00～オクタヴァOctavaの宗教儀式（終了後逆コースで行列して帰る）

②期間中の１日の時間に沿ったスケジュール

時間、内容、場所の順に記す。

06：45～（７／７～14）、ブラス・バンドによる起床たのための演奏行進　、コンシストリアル広場と闘牛場。

08：00～（７／７～14）、エンシエロと若い雌牛との闘牛（サント・ドミンゴの闘牛の囲い場からサント・ドミンゴ通り、エスタフェタ通りを経て闘牛場へ（825メーター）。

09：30（７／７～14の内、７と10は09：00）、ヒガンテスとカベスードスの街の訪問つまり踊りながら街を練り歩く、バスステーションから街路や広場へ

11：00～、地方の祭り（７／８～９）、伝統的なバスク地方の闘牛（７／10）＊闘牛の上をアクロバティックに飛び跳ねたり、腰で闘牛が向かって来るのをかわし、その巧妙さや美しさを競う競技、闘牛場。

11：00～14：00（７／８～14）、「子供たちの街」と名付けられたパフォーマンス、コンデ・デ・ロデスノ広場。

11：30～（７／11）、リコルダドレス祭＊闘牛の角にリボンが付いたリングをはめてその数を競う競技、闘牛場。

11：30～、12：00～、12：30～（７／６～14）
ブラスバンド、バスク地方の民俗音楽演奏、クラウン芝居、民俗舞踊、農民のスポーツ、民謡の歌唱、クラシック音楽など、劇場：ガジャレ劇場、屋外：コンシストリアル広場、サン・フランシスコ広場、ロス・フエロス広場、ラ・クルス広場、コンデ・

デ・ロデスノ広場（子供の祭りの開催式を挙行するなど、子供に因むイヴェントの広場）など。
17：30～（7／7～14）
騎士の行進（闘牛士の行進を導き、開幕を告げる役をする）、コンシストリアル広場から闘牛場へ（闘牛場）。
18：00～（7／7～14）
子供たちの都市の開始儀礼（7／7）と子供を対象にしたクラウンなどが登場する笑いのある物語のパフォーマンス（7／8～14）、コンデ・デ・ロデスノ広場
＊サン・フェルミン祭は若者や大人だけでなく子供のものでもある。「子供の都市」という開始儀礼があるように、子供たちのためにも多くのイヴェントが計画されている。クラウンの芝居や民俗的なパフォーマンスが毎日あり、城跡に出来たシウダデラ公園の一角に仮設された遊園地では深夜まで遊ぶことができる。サン・フェルミン祭は子供の無礼講の時期でもある。
18：30～21：30頃（7／6～14）
闘牛（3人のマタドールが各3回づつ行う、かなり様式化されていて1回が20分程度、7／6のみは馬で闘牛する）。
20：00（7／6～14）
オーケストラ演奏がある野外パーティ、アントニウッティ公園、ラ・クルス広場（7／6はない）。
21：00（7／6～14）
伝統音楽トゥキストゥラリスとガヤテロスの演奏、カスティジョ広場。
21：30～
演劇上演　（7／7，8）、オペラ上演（7／9，10，11）、バレエ上演（7／12，13）、ガジャレ劇場。
22：00～（7／6～14）
火だるまの牛の走り（かつては本物の火だるまの牛を行進させたが、現在は仕掛け花火が取り付けられた機会仕掛けの牛を人間が背負い、花火に点火して火を四方に発射しながら走る）、サンティアゴ広場からコンストリアル広場まで。
23：00～（7／6～13）
エンシエッリッジョ（小さな牛走の儀礼。明朝のエンシエロに走る闘牛をサント・ドミンゴの坂下から坂上の牛舎まで440メートルのコースで走らせるもの。観客は市庁舎でチケットをもらい柵の上から見守る。牛が走ってくると観衆は周りの人に静かにするように合図して、厳かな雰囲気の中で行われる。）、サント・ドミンゴの坂下から牛舎まで。
23：00～23：15頃（7／6～14）
大花火大会（ヴァレンシアの仕掛け花火団が交替で実施）、音楽演奏が同時にある
＊都心の公園での花火は珍しく、花火の間はパンプローナの郊外を含めて、ものすごい炸裂音がする。まるで戦争時の大砲のように鳴り響き、室内にいると恐ろしくて落ち着かない程だ。シウダデラ公園。
23：30～01：30（7／6～13）
オーケストラ演奏とともにダンスパーティ、ラ・クルス広場。
24：00～（場所により03：00、7／6～13）
ブラスバンド、オーケストラ、ジャズの演奏や祭典が行われる野外パーティおよびフラメンコ、コンシストリアル広場、アントニウッティ公園、カスティジョ広場、サラサーテ大通り、山口公園、サン・ホセ広場、メディア・ルナ公園、ロス・フエロス広場等
24：00～（7／14実施には15の零時から明け方まで）。
1999年サン・フェルミン祭の終わりの行事「哀れな私」Pobre de Miと打ち上げ花火
＊市長が市庁舎のヴェランダから終了の宣言をすると、人々は「哀れな私」を歌い、手には蝋燭をともして踊る。人々は名残惜しそうにブラスバンドの演奏に合わせて歌い踊り続ける。コンシストリアル広場。